

中国語認知言語学序説
—ことばとコミュニケーションの関係について—
An Introduction to the Chinese Cognitive Grammar
about the Relationship of Language and Communication

大島吉郎

OSHIMA Yoshiro

Abstract: 人類にとってことばはコミュニケーションのための有効な手段であり、コミュニケーションの目的は、個の生存と種の保存、集団の維持、発展にある。人類は進化の過程で通信手段としてのことばの完成度を高めることにより、高度なコミュニケーション能力を身に付け、より生存に適した集団を形成できるようになったと考えられる。中国語母語話者は閉じた集団における緊密な関係性に裏打ちされたコミュニケーションに優れ、集団間においても個人的関係を積極的に築き、ネットワークを張り巡らそうとするものの、集団としては他の異なる集団との相互扶助、相互依存を好まない傾向を示す。

Keywords: ことば 通信手段 コミュニケーション 集団 中国語 漢民族 最適化

目次

- 0 はじめに
 - 1 コミュニケーションとは
 - 2 コミュニケーションの手段としてのことば
 - 3 ことばが形成する同質的な集団
 - 4 方言への分岐
 - 4.1 方言への分岐
 - 4.2 社会方言への分岐
 - 5 同質と異質のせめぎ合い
 - 6 おわりに
- 参考文献

0 はじめに

本稿は、中国語及び漢民族社会の観察を通して得られた、ことばが持つはたらきとコミュニケーションの関係について、集団形成の視点から本質的な理解を試みようとするものである。コミュニケーションの手段としてのことばの持つはたらきを考えると、人類が集団を形成することがことばを獲得するに至った初期的理由であることを仮説として提起する。

1 コミュニケーションとは

生物の進化の過程で哺乳類から誕生した人類¹は、本来自然環境、食物連鎖の中では弱者であると考えられる。ある何らかの特別な身体能力、頑強な肉体——例えば、俊敏、俊足、屈強、剛腕を生得的に具えた個体でない限り、各々の個体は攻撃、防御のための身体能力に劣り、野生の中では常に上位の捕食者から食餌、食糧として狙われる存在であり、生命の危険にさらされる生き物であった。動物界の上位捕食者から身を守り、生き延びるためには、個としては非力な他の生物同様、武器や防御手段に替わる、あるいはそれにも匹敵する鞏固な集団を形成し、相互に扶助、依存する体制を整えることが環境に適応する最もふさわしい方法——戦略 strategy であることをある時発見し、集団形成のための手段としてことば——言語能力を獲得し発達させて来たのが、その後裔として現在地球上に存在する我々人類——Homo sapiens であると考えてよいであろう²。人間は社会的動物であると称される所以でもあり、現在の我々一人ひとりには国家という枠組をはじめ、様々な目的に応じて形成された集団・組織から離れて生命、財産、安全を保つことは極めて難しい。一方、進化の過程で、意志疎通・情報共有を目的とする通信手段——コミュニケーションのためのことばを獲得できなかつたがために自然環境への適応に失敗し、その結果、望ましい集団の姿を形成できず滅んでしまった人類も少なからず存在していたものと推測される³。その理由の一つに、滅んでしまった人類のことばが、通信手段としては不完全で、構造的な脆弱さを帯びていたため、集団形成、維持発展のために必要とされる機能を発揮できなかった可能性の有ることが指摘されよう。また別の理由として、ことばによる相互の関係性の構築という段階で、集団形成——コミュニケーションがうまく機能せずに滅んでしまった可能性のあることも推測される。

樹上生活という生活形態から、平地に出て地上活動による（直立）二足歩行を始めたホモ・エレクトゥスから始まる約 190 万年にも及ぶ長い人類の歴史の中で、幾多の危機や困難を乗り越え、完成度を高めて来た我々人類のことばが、今日でも絶えず変化を遂げ、ブ

¹ 広義として猿人、原人、旧人、新人 Homo sapiens を総称する。人類の定義は、横隔膜が有る、腹部に肋骨が無い、の二点に絞られる。狭義では新人を指す。

² 自然淘汰の結果としてとらえることが妥当であろう。

³ 篠田謙一 2022:38 「図 2-2 ネアンデルタール人の系統と分岐の模式図」参照。

ラッシュアップ——最適化を遂行するのは、その時々⁴の所与の環境に適応すべく、さまざまな試行錯誤を繰り返して生命を維持し、婚姻、子育てを効果的に行うことで子孫を残して来た経験が根底にあるからにほかならない⁴。

このように、集団とことばの関係は、相互に依存しあって発達を遂げるという過程をたどって来たもの⁵と考えることには、一定の合理性が認められるであろう。まず集団が存在しなければ、通信手段としてのことばの必要性は生じず、翻って共通のことばが存在することにより、自ずと集団が形成されて来たとも考えられるからである⁵。そうであるならば、集団もことばも最適化を模索しながら絶えず調整、修正を繰り返して来た⁵と考えるのが自然であり、ことばの発生と集団の形成のどちらが先であるかについて、相補的な関係に鑑みれば、何らかの結論——決定論を下す必要はないであろう。むしろ、ことばはどのようにして関係性構築を目的とするコミュニケーションの道具、手段としての「ことば」になり、人類に能力として獲得されるようになったのかについて、仮説を立て推論することの方に、より重要な意味があるもの⁵と考える。

[表1 猿人・原人・旧人・新人]

種類	最も古い年代	知られている地域
猿人		
オロリン・トゥゲネンシス	610 万年前	ケニア (バリngo)
アルディピクテス・カダッパ	580 万年前	エチオピア (ミドルアワシュ)
サヘラントロプス・チャデンシス	650~600 万年前	チャド
アルディピクテス・ラミドウス	440 万年前	エチオピア
アウストラロピテクス・アナメンシス	420 万年前	エチオピア、ケニア
アウストラロピテクス・アフアレンシス	380 万年前	エチオピア、ケニア、タンザニア
アウストラロピテクス・アフリカヌス	300 万年前	南アフリカ (ハウテン州)
アウストラロピテクス・エチオピクス	280 万年前	エチオピア、ケニア
アウストラロピテクス・ボイセイ	230 万年前	エチオピア、ケニア、タンザニア、マラウイ
アウストラロピテクス・ロブストゥス	180 万年前	南アフリカ (ハウテン州)
原人		

⁴ ことばが変化し続ける理由の一端をここに求めることができるであろう。「ことばの乱れ」と言われる現象は、長期的な視野に立てば、環境の変化に即応した最適化を図り、集団としての生命力を高めようとする行動の一つであると解釈することができる。

⁵ 集団を形成する動物、例えばゴリラ、ニホンザル、ライオン、シマウマ、ヌーなど群れで生活、行動する動物の存在を上げることができる。しかし、いずれも自然環境がもたらすリスクに対処するには組織化、社会化の段階が高くない点が指摘されよう。

ホモ・ハビリス	240 万年前	ケニア、エチオピア、タンザニア、マラウイ ケニア、エチオピア、エリトリア、 タンザニア、マラウイ、南アフリカ、 アルジェリア、ジョージア、インドネシア、中国
ホモ・エレクトゥス	190 万年前	
旧人 ホモ・サピエンス・ネアンデルターレンシス (ホモ・ネアンデルターレンシス)	30 万年前	ヨーロッパ、中東、シベリア、中央アジア
新人 ホモ・サピエンス	30 万年前	全世界

(高井正成・中務真人 2022 : ix より引用)

2 コミュニケーションの手段としてのことば

集団形成のためにコミュニケーションが必要とされた理由について、衣食住を安定的に保障することで、個の生存と、より安定した種の保存——婚姻、子育てにより子孫を残すために、集団内における相互扶助、相互依存の獲得を目的とした可能性の高いことを、本稿は仮説として提示することにした。現代社会における相互扶助、相互依存は、与えられた命を守り、かつ生き抜こうとする個の生物的本能に基づく生存のため、という一義的意味から、個が所属する集団、組織をより安定した、有機的なつながりを持つ経済的、政治的社会機能へと拡張しており、個はこれらの機能維持、発展を前提として、集団、組織に対して最大限に貢献する責務を負うことを暗黙知とする。個の集合体である集団、組織が、あたかも一個の意志を持った生命体であるかのように振る舞うのである。これこそが現代社会のあらゆる場面、状況において、コミュニケーションが重要視される要因の一つであると考えてよいであろう。集団は、成員としての個にとって生存を保証してくれる「安全装置」——セーフティーネットであると同時に、捕食者、外敵から身の安全を守ってくれる、防御・反撃能力を持った力強い「暴力装置」——警察、軍事力としての機能も有するのである。翻って、相互扶助、相互依存を拒絶し、他者にそれを求めない——集団の中で孤立する個には、通信手段としてのことばは用をなさず、よって洗練された高度なレトリックも必要とされないため、もとより円滑なコミュニケーションが成立することもない。集団内の社会性を否定して対立を示す個が、集団、組織に所属し自身の生存を委ねようと

する戦略は、集団の維持にとっては負荷となるため、コミュニケーションは困難なものとならざるを得ない。集団の安定的維持、発展に対する貢献がなされなければ、やがて相互依存、相互扶助の対象外として排除される存在となることから、コミュニケーションの重要性が明らかとなる。

より安定した鞏固な集団は、必然的に規律の遵守と利害の共有を成員に求める。自然環境、社会環境が厳しい空間における集団は、結束を強めるために自ずと規律も体系化され、独自の社会規範、倫理観、宗教、社会文化が醸成されて行く。漢民族⁶においては集団の領袖——王を中心にして、時に排他的結束性を示す集団が形成されて行く。古代の城塞都市、また近世の城郭都市の形態からは強い排他性が感じられる。収奪者からの防御を目的として城壁を巡らせ、その中に相互扶助、相互依存を目的とする共同体が居住する。厚く高い城壁と固い城門によって外界から守られた空間の居民は、閉じた世界において同じことばを通信手段として身に付け、その発達を促すことで、集団の存立を担保するのである。

集団意識と言語の関係について一例を上げてみることにしよう。単音節語を基本とする中国語は形態変化に乏しい言語であるため、単語の品詞、文法的機能は、その単語が文中でどのように振る舞うか、文中でどの位置に置かれるかによって決定される。例えば、“着”と書かれる語について見てみることにしよう。

- (1) 我没着儿了。(「思いつく限り試してみたが」打つ手が無くなった。)[着 zhāo:「方法」の意を表す名詞で“招”とも表記]
- (2) 睡着了。(寝付いた、寝入った。)[着 zháo:動詞に接辞して「目的の達成、結果の出現」の意を表す補語]
- (3) 他们正谈着话呢。(彼らはいま話をしているところだ。)[着 zhe:動作・行為、状態の持続を表す助詞]
- (4) 着人前来领取。(係の者に受け取りに来させる。)[着 zhuó:「遣わす、派遣する」意の動詞]⁷

このように、中国語は文法依存型言語ではなく、文脈依存型言語としての特徴を有する。この特徴が顕著に現れるのが文脈依存による省略の多様性である。例えば、次の例(5) a、b 二人の対話、例(6)a、b、c 三人の会話の例を見られたい。

⁶ 篠田謙一 2023:261-262 は「漢民族」について、「(前略)、21世紀に可能になった古代ゲノム解析によって、世界各地の地域集団の成立史が明らかにされつつあります。(中略)。中国の漢民族は、5000年前から始まる北東地域と南部地域にあった三つの集団の緩慢な融合の過程の中から生み出されたもので、現在でもそのプロセスが続いていることがわかっています。遺伝的にまとまった集団が長期にわたって存続しているわけではないのです。」と指摘する。

⁷ 用例はいずれも《現代漢語詞典(第7版)》2016年、商務印書館より引用。訳文と説明は筆者。

(5) a: 谁啊? b: 我。

《戸をたたく音》

どなた? あたし。

a: 你来啦! b: 他呢?

いらっしゃい! あの方は?

a: 他没来。 b: 他怎么没来?

まだ来ないの。 どうしてまだ来ないの?

a: 他不来吧。 b: 不。他一定来。等一等吧。⁸

来ない気なんでしょう。 いえ。きっと来ますわ。ちょっと待っててね。

(6) a: 谁敲门呢? b: 是他吧。

《戸をたたく音》

誰が戸をたたいているの? あの方でしょう。

a: 我去看一看。

あたし見にいってきます。

a: 谁啊? b: 我。

《戸口まで歩いてゆく音》

どなた? あたし。

a: 请进来。 c: 你好?

どうぞおはいりください。 お元気?

a: 好。请坐。 c: 你早来了吗?

元気よ。おかけなさいな。 あなた早く来たの?

b: 刚来。 c: 对不起。我来晚了。⁹

いま来たばかりよ。 すみません。おそくなってしまって。¹⁰

例(5)、(6)“a: 谁啊?”は疑問代詞と文末の語気助詞、“b: 我。”は人称代詞のみでの対話が成立している¹¹。いずれも単純な一語文であり、動詞が用いられておらず、“誰”、“我”が主語なのか、それとも目的語なのかさえも形式の上からは確かめようもない。しかし、この対話は話者と聞き手の置かれている状況が明らかであり、話者の視点、情報の焦点が

⁸ 倉石武四郎 1958『ローマ字中国語 初級』I (p.7-8)より引用、ローマ字を簡体字にして表記。

⁹ 倉石武四郎 1958『ローマ字中国語 初級』II (p.10-11)より引用、ローマ字を簡体字にして表記。

¹⁰ 訳文は倉石武四郎 1958:79より引用。

¹¹ “你是谁(啊)?”の意味であるが、この言い方を使うと質問ではなく、詰問、尋問の口調となり、“谁啊?”とでは話者と聞き手の関係性に大きな相違が生じる。日本語でも似た言い方が成立するが、男性、女性で言い方が異なる。例えば、「誰(ですか)?」は口調が強すぎる。「どなた(ですか)?どちら様(ですか)?」が一般的である。“谁啊?”は語用論の観点からは「名前を名乗り、身元を明らかにしてほしい」という要求を表している。

聞き手によって理解されることで会話が成立している。a と b が初対面でないことは明らかであり、a の家のドアをノックする人が限られていて、来訪者を声のみで識別できるほどの関係性が築かれていなくてはならない。極めて限られた範囲における集団の成員同士でこそ成立する遣り取りであると考えられる。では、中国語においてなぜこのようなコミュニケーションが成立するのか、次にその要因を考えてみよう。

秦の始皇帝が北方異民族の侵入を防ぐために築いた長城は、その城壁の内側と外側を隔て、併せて焚書を行うことで、万民に同じ文字とことば——共通の言語の通用を強く求めたのは、統一国家として当然の戦略であった。強大な統一王朝に反旗を翻す勢力は、服従することなく地方に割拠し、独自の集団とことばを確立することで、反抗の意を示したであろうことは想像に難くない。国家を安定的に統治するためには、勅命——強権による確固たる共通語の普及——言語政策が至上命題であるのはこのような理由によるのである¹²。

3 ことばが形成する同質的な集団

人類ホモ・サピエンスが集団を形成するに当たっては、出アフリカ¹³による壮大な移動の開始が深く関係しているようである。篠田謙一 2022:25 は「共同体の規模が、大脳の新皮質に比例すると考えると、猿人の社会はチンパンジーと同程度の 50 人、原人段階では 100 人、そしてホモ・サピエンスでは 150 人程度になります。実際にホモ・サピエンスは、狩猟採集民から現代人の社会まで、150 人をひとつの社会構成の単位としていることがわかっています。」と述べる¹⁴。食糧供給の観点からも集団の規模の調整が図られ、大きくなりすぎないように一定の規模を保ちながら、世代交代による新たな集団を生み出して来たのであろう。より大きな集団が形成されるのは狩猟採集型生活形態から牧畜、農耕への移行が考えられる。

生存のための利益共同体としての閉じた集団において、同質性の高い通信手段——同じことばが求められることは容易に推測される。集団形成当初の原初的段階においては身振り、手振りなどボディランゲージを交え、シンプルな音声、あるいはうめき声に近いオ

¹² イギリスによるインドの植民地経営の方針が、インドにおける多民族の言語を敢えて統一せず、宗主国の言語である英語を通用語として設定したのは、独立運動を抑制することを企図したものであると考えられる。1956 年以降の中国における「普通話普及運動」は、国家運営の通則を実践しようとするものである。清朝においては雍正帝が福建省における官話の普及を命じた例がある。

¹³ 篠田謙一 2022:59 参照。「アフリカで 20 万年前に誕生したホモ・サピエンスが、6 万年ほど前に出アフリカを成し遂げて、旧大陸にいたホモ・サピエンス以外の人類を駆逐しながら世界に広がった。」と述べるが、なぜ出アフリカを決行するに至ったかの原因、理由について、氷河期と乾燥期が短い間隔でおとずれる気候変動、海水面の大幅な低下などを上げる。

¹⁴ 篠田謙一 2023:133 はまた婚姻の観点から集団の規模を、「詳細なゲノム解析から、彼らの婚姻の規模も推定され、およそ 200~500 人程度の集団の中で婚姻が行われていたと推定されています。これは現代の狩猟採集民とほぼ同じで、ここから当時の社会ネットワークも、現代の狩猟採集民と同様に、近親での婚姻を避けるシステムが備わっていたのだらうと想像されています。」と指摘する。

ノマトペ¹⁵を使用して情報伝達を行っていたのかも知れない¹⁶。ことばの本質が音声であると言われるのは、ことばの発生、発達の過程を考えれば当然のことであると言えよう。発声器官として最も重要な声帯が発達すると並行して、ことばを認識するための聴覚器官、聴覚中枢の発達も促されたものと考え得る。軟骨と粘膜から構成される声帯は、人類の骨の化石から見つかることがないため、何時、どの地域の人類が声帯を発達させるようになったのかを物証的に確かめることはできない。とは言え、頭骨の形状と容積から咽頭に声帯が形成されていたかの大よその見立ては可能である。それは出アフリカを発端とする6万年前のホモ・サピエンスの頭骨が巨大化することによって確かめられるであろう。篠田謙一 2022:12 の記述に、「一般に、チンパンジーと共通の祖先から人類の系統が分岐したのは、私たちの祖先が樹上の生活に別れを告げて地上に降り、直立して二足歩行を始めたことを契機にしていると考えられます。人類の最大の特徴である脳の顕著な増大が起こるのは、チンパンジーとの共通祖先から分かれて数百万年後のことなので、直立二足歩行がヒトの最大の要因だったと考えられているのです。」とあるように、「地上生活、直立二足歩行、集団形成、ことばによるコミュニケーションの遂行」が頭蓋容積の増大と因果関係にあると考えてよいであろう。ホモ・エレクトゥス（後期）との差は310ccに及ぶ。しかし、ホモ・サピエンスに比べて、ネアンデルタール人の頭蓋容量が100cc大きいことこの理由には謎が残る。篠田謙一 2022:65 は、「ホモ・サピエンスの持つ言語能力に関係するといわれている *FOXP2* 遺伝子を取り囲んでいるゲノム領域では、ネアンデルタール人由来のものがまったく見られないことが判明しており、そこから言語に関する遺伝子領域が、ネアンデルタール人と私たちの違いを生み出している可能性も指摘されています。」と述べ、遺伝子レベルから両者の相違点を指摘する点は大変興味深い。

ホモ・サピエンスの出アフリカから始まる壮大な移動の過程で、集団はことばとコミュニケーション、規律の初期設定を行うとともに書式を整え、独自の言語文化、社会文化を醸成しながらコミュニティを形成して来たものと考えられる。我々人類にとっての「民族（性）」の由来は、祖先が遂行した初期設定と書式の異なりが産出する、重層的な姿、形であり、概念と行うことができるのではなかろうか。

¹⁵ 窪園晴夫 2015、また、今井むつみ・秋田喜美 2023 参照。エドワード・サピア 1957:5 は「(前略)。従ってことばの起源の擬音語説—すべてのことばは模倣的な性格の音声からの漸次的な進化であると説こうとする学説—は、今日われわれの知っている言語の現在の状態よりも、さらに本能的な水準へ、われわれを近づけるものではない。その学説そのものについていえば、間投詞学説と、ほとんど同様に、信じられない。」と述べ、言語の起源にオノマトペが関わる考え方について、否定的見解を述べている。

¹⁶ 町田健 2001:30-50 は「原始的」言語とその大いなる欠陥」についての考察を行う。

[表2 脳の大きさ(頭蓋容量)から推定した永久歯への生え変わり時期と寿命]

種類	女性体重 (kg)	頭蓋容量 (cc)	大臼歯萌出 時期(年)	寿命 (年)
ホモ・サピエンス	50	1370	6.3	66
ネアンデルタール人	50	1470	6.6	69
ホモ・エレクトゥス(後期)	40	1060	5.4	60
ホモ・エレクトゥス(前期)	40	810	4.6	52
ホモ・ハビリス	35	642	4	47
頑丈型アウストラロピテクス	40	500	3.4	40
アウストラロピテクス・アフリカヌス	30	442	3.2	39
アウストラロピテクス・アファレンシス	30	400	3	37
チンパンジー	40	390	3.3	45

(高井正成・中務真人 2022:173 より引用)

集団形成に必要な最低限の語彙、文法が音韻体系とともに試行錯誤を経ながら獲得されて行くプロセスは、身体的な進化の過程が胎内で再現されるのと同じく、乳幼児が集団の一員として自立するためのことばを習得する——大脳皮質が形成される過程と軌を一にするように推測されるのである。不確かな発音や言い間違いが修正され、理解力の向上が伴うまでには、それ相応の経験と努力が必要とされる。

通信手段としての音声は、例えばモールス符合のような信号・記号の体系であり、共通のコードを使用し、意味を構成するには一定の文法に則ることが求められる。集団ごとにことばが異なるのは、その基となるコードが集団独自の体系を長い旅路の果てに営々と築き上げてきたからに他ならない。

[表3 欧文モールス符合] 17

【欧文モールス符号】		【数字】	【記号】
A · -	N - ·	1 · - - - -	. 終点
B - · · ·	O - - - -	2 · · - - -	, 小読点
C - · · ·	P · - - ·	3 · · · - -	: 重点又は除法の記号
D - · ·	Q - - - -	4 · · · · -	? 問符
E ·	R - · -	5 · · · · ·	' 略符
F · · · -	S · · ·	6 - · · · ·	- 連続線、横線又は減算の記号
G - - ·	T -	7 - - - · ·	(左括弧
H · · · ·	U · · -	8 - - - · ·) 右括弧
I · ·	V · · · -	9 - - - · ·	/ 斜線又は除法の記号
J · - - -	W - - -	0 - - - - -	= 二重線
K - · -	X - · · -		+ 十字符又は加算の記号
L · · · ·	Y - · - -		" 引音符
M - -	Z - · - ·		x 乗算の記号
			@ 単価記号

4 方言への分岐

家族を中心とする小人数の集団を起点とする集団は、やがて幾つもの血縁、地縁からなる小集団と混ざり合いながら相互扶助、相互依存の体制を整え、より整った集合体へと進化して行ったものと考えられる。そのような集合体が大小さまざまな統合、分離を繰り返しながら、やがて小国が形成され、統一王朝となり、更に分裂、再統合へと進む集合離散のサイクルにあるのが、中国における社会の歴史であると言えよう¹⁸。社会的弱者は強大な集団に吸収されるか、あるいは集団から逃亡し、逃亡してたどり着いた新たな土地で集団を形成する方途を選ぶ。その代表的な例が客家集団であり、政治的混乱、戦乱、飢饉などが起こるたびに、中原から辺境へと逃避し、その結果、現在の広東省、福建省山岳部を中心に、南方各省に鞏固な集団を形成することで、言語・文化——アイデンティティーを維持し続けている¹⁹。特に福建省西部に居住する客家は“土楼”、“围屋”などと呼ばれる円形、または方型の構造物を造営し、あたかも巨大な要塞のような集合住宅を構える。内部は三層、あるいは四層からなり、一族数百人が暮らす。堅牢な作りは外敵からの襲撃を防

¹⁷ 【みんなの知識 ちょっと便利帳】無線局運用規則第十二条 別表第一号 モールス符号 - 和文五十音順 (イロハ順) (benricho.org) より引用。

¹⁸ 愛宕元 2023 参照。

¹⁹ 田恵剛 1993 は客家方言——客家語について、「広東梅県で話される言語が代表的である。主に広東、広西、福建、江西の4省に分布し、使用人口は大よそ4,500万人、漢族総人口の4%を占める」と記す。游汝杰 2004:17 は客家語について、「客家語は七つの省、自治区に分布する。すなわち、広東、広西、福建、台湾、江西、湖南、四川にまたがる200余りの市と県である。その中でも広東東部及び中部、福建西部、江西南部に使用地域が集中しており、客家話者のみで構成される市、県も存在する。海外ではマレーシアなどの華人コミュニティでも客家語が話される。」と説明する。罗美珍・邓小华 1995:4 は海外300万人を含めると9,610万人と推計する。

ぎ、一族の団結を一層強めるはたらきをする。

[表4 客家遷移の歴史]

	時期	要因
第一次	東晋から隋唐の間	五胡の乱により山西、陝西、河南一帯で発生した流人が安徽、河南、湖北、江西及び江蘇一帯に移動
第二次	唐末から宋の間	黄巢の乱のとき、河南西南、江西中部・北部及び安徽南部の住民が、閩西（福建寧化、汀州、上杭、永定）、贛南、贛東に遷移し、遠くは遠循、恵、韶などの地に至る
第三次	宋末から明初	蒙古南進のとき、閩西、贛南広東東部・北部に遷移
第四次	清朝康熙から乾隆年間	生活環境が困窮し、広東北部・東部及び江西南部から四川、台湾、広東中西部及び湖南広西及び湖南、広西に遷移
第五次	清朝乾隆、嘉慶以降	移住先で先住民と騒乱が起こり、粵中（新興、恩平、台山、鶴山）の客家籍の人々が更に遠くの粵西（高、雷、欽、廉諸州）及び海南（例えば崖県、安定）に遷移
時間上：	西晋 — 東晋 — 唐末 — 宋元 — 康熙 — 乾隆・嘉慶	
空間上：	中原 — 皖贛 — 贛南 — 粵東 — 湘川桂 — 粵西 江淮 — 閩西 — 粵北 — 台湾 — 海南	

(罗肇锦 1998:25-26 を基に大島が作成)

4.1 方言への分岐

政治的混乱から、また戦乱、飢饉などにより流浪する集団は、もともとの母集団から分離することで、新たな環境に適応するための集団を形成し、移住先で現地の環境に合わせたことばの最適化を進める。その結果、現地方言との言語接触をはじめとして、母集団とは異なることばの体系が次第に形成され、年月を経ることで相互のことばの差異が拡大することになる。母集団のことばも当然のことながら最適化による変化を免れない。中国という広大な国土において、集団間の交流が何らかの理由で途絶えることにより、相互にコミュニケーションの成立しない程度にまで変異が進行したのが、現在の漢語方言である。

また、既存の王朝の滅亡と、新たな王朝の勃興も共通語——雅言、官話に強い影響を及ぼす。中国における王朝の交替による王都の遷移は、共通語の基礎方言に大きな変化をもたらし、その音韻体系、語彙、文法が構造的に変化することになる。中国語の変化が王朝

の交替とともに起こる原因はここに求められる²⁰。

[表5 中国語の時代区分]

古代漢語			→	近代漢語		
上古	→	中古		近代	→	現代
先秦	西漢	東漢 隋	初唐 中唐	晚唐 五代	宋 元 明	清 →

(江藍生 1994:20 より引用)

4.2 社会方言への分岐

集団が社会性を帯び、発展して行く段階で富の蓄積とともに分業が発生し、それとともに階層が出現する。分業による職能集団の形成、ならびに富の偏在による階層の集団化は、それぞれのコミュニケーションの手段としてことばの最適化の進行を促す。その結果、集団のことばの特徴²¹が形成され、集団としての独自性が印象付けられる。集団ごとに形成される音韻、語彙、文法的特徴は社会方言と考えられ、社会方言の形成方式は、初期的集団におけることばの形成方式と相似形であることが類推される。

[表6 中国語方言の区分と使用人口]²²

方言区	官話	晋語	呉語	贛語	湘語	閩語	粵語	客家語	平語	徽語
使用人口	66,224	4,570	6,975	3,127	3,085	5,507	4,021	3,500	200	312

(単位は「万人」)

5 同質と異質のせめぎ合い

ある一まとまりの集団が小さな集団の集合体であるとする、多様な性質を帯びた様々な集団が多面的、かつ重層的に、相互につながりを持ちつつ全体を構成していることが考えられる。それぞれの集団が成員間の円滑なコミュニケーションを必要として、ことばの最適化を促すとすれば、集団の性質に応じて社会方言が存在することになる。個々人が集団の成員を複数兼ねるとすれば、どの集団と関わるかに応じてその社会方言を使い分けることで、集団の成員としてのアイデンティティーが確立するのである。

社会環境の変化、世代交代は社会方言の変化を促す。新語、流行語の出現に対して異質性排除の意識がはたらきつつも、ことばの最適化も一方で進行するため、周縁部分におい

²⁰ 江藍生 1994 参照。

²¹ 金水敏 2023 参照。

²² 游汝杰 2004:5 より引用。「平語」の原文は“平話”、広西チワン族自治区東部に話される方言。「徽語」は安徽省南部の方言を指す。客家語の使用人口は田恵剛 1993 との統計に 700 万人の差が見られる。

ては変化を求める力と、変化を拒む力のせめぎ合いが常に起こっていると考えてよいであろう。

6 おわりに

ホモ・サピエンスの出アフリカに伴う果てしない旅路²³の中で、集団のリーダーは目的地を定め、安全に移動するために、集団の行動を制御する必要があったと考えられる。次の移動地で集団を無事に野営、あるいは定住させるためには、方位とそれに伴う基点（視点）を設定し、移動距離と、移動に必要な時間を計り、集団のメンバーに伝え、行動を調整することで、方位と時間についての概念が確立するとともに定型化が行われ言語化して行ったものと推測される²⁴。特に時間は、太陽、月、星座の運行から計算によって割り出されたものと考えてよい。天文学、暦学は古代から発展を遂げて、王権の象徴とされていることから、時間の管理が重要視されて来たことが分かる。空間における経路は起点と着点がセットになり、行動は進行に対して開始と完了が相対的な関係を有することが、人類にとって普遍的な認知であっても何ら不思議ではないのである²⁵。時点の概念は地点の概念と写像の関係にあるものと考えられる。例えば、

[表7 時間と空間の写像関係]

空間・方位に対する認知：	起点・経路・着点	前方・基点・後方	上方・中央・下方
時間・時点に対する認知：	開始・進行・完了	過去・現在・未来	上期・今期・下期

(大島 2021・2023 を基に作成)

認知の主体である我々人類の存在は、空間の存在を前提（基盤）とする。人体の感覚器に発するすべての認知は空間に依拠し、言語も同様に空間表現を根底に据える。ヒトの認知が空間表現と深く関わるのは、我々の祖先であるホモ・サピエンスが集団を形成し、安住の地を求め、遥かアフリカの地を出て歩んで来た経路——空間移動の歴史と深く関わっているからと考えられるのである。

²³ 篠田謙一 2022:157 は「グレート・ジャーニー」と称する。

²⁴ 位置取りのための「起点」、「基点」は、話者の視点をどこにどう据えるかが問題となる。原初デフォルトにおける視点は、話者を絶対的中心（世界の中心）とする「主体的（主観的）視点」が根底にあり、次の段階として、聞き手との関係性による「客体的（客観的）視点」のペアが「相対的視点」を構成する。やがて北斗七星を目印とする絶対的中心（天体の中心：東西南北）の視点へと発展することが推測される。

²⁵ それが文法化されるか否かは、集団がそれぞれの言語体系による。中国語は孤立語的傾向を強く示すことと関連して、テンス、アスペクトともに語彙的手段により言語化される。

参考文献

- [01] 今井むつみ・秋田喜美 2023 『言語の本質』、中央公論社。
- [02] 愛宕 元 2023 『中国の城郭都市 殷周から明清まで』、筑摩書店。
- [03] エドワード・サピア著、泉井久之助訳 1957 『言語 ことばの研究』、紀伊國屋書店。
- [04] 大島吉郎 2021 「中国語における「状態」についての試論—「状態」をどう規定するか—」、大東文化大学大学院『中国言語文化学研究』第 10 号 (p.11-29)。
- [05] ———— 2023 「中国語における空間の文法化に関する研究(初稿) — “了₁”、了₂”の文法的意味を中心に—」、大東文化大学大学院『中国言語文化学研究』第 12 号 (p.89-108)。
- [06] ガイ・ドイッチャー著、棕田直子訳 2022 『言語が違えば、世界も違って見えるわけ』、早川書房。THROUGH THE LANGUAGE GLASS *Why the World Looks Different in Other Language* by Guy Deutscher
- [07] 葛兆光著、永田小絵訳 2021 『完本 中国再考 領域・民族・文化』、岩波書店。
- [08] 金水 敏 2023 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、岩波書店。
- [09] 窪園晴夫 2017 『オノマトペの謎 ピカチュウからモフモフまで』、岩波書店。
- [10] 小泉 保 1995 『言語学とコミュニケーション』、大学書林。
- [11] 酒井邦嘉 2002 『言語の脳科学』、中央公論社。
- [12] 篠田謙一 2022 『人類の起源 古代 DNA が語るホモ・サピエンスの「大いなる旅」』、中央公論社
- [13] 高井正成・中務真人 2022 『化石が語る サルの進化・ヒトの誕生』、丸善出版。
- [14] 高木桂蔵 1991 『客家 中国の内なる異邦人』、講談社。
- [15] 中川尚史 2015 『“ふつう”のサルが語るヒトの起源と進化』、ぷねうま舎。
- [16] 町田 健 2001 『言語が生まれるとき・死ぬとき』、大修館書店。
- [17] 丸山圭三郎 2008 『言葉とは何か』、筑摩書店。
- [18] 三井 誠 2005 『人類進化の 700 万年 書き換えられる「ヒトの起源」』、講談社。
- [19] 村田和代 2023 『優しいコミュニケーション 「思いやり」の言語学』、岩波書店。
- [20] 山鳥 重 1998 『ヒトはなぜことばを使えるのか 脳と心のふしぎ』、講談社。
- [21] ルソー著、増田真訳 2016 『言語起源論 旋律と音楽的模倣について』、岩波書店。
- [22] R. M. W. ディクソン著、大角翠訳 2001 『言語の興亡』、岩波書店。
- [23] 江藍生 1994 「试述呂叔湘先生对近代汉语研究的贡献」、《中国语文》第 1 期 (p. 16-21)。
- [24] 林 涛 1998 「从官话、国语到普通话」、《语文建設》第 10 期 (p. 6-8)。

- [25] 刘镇发 1998 「客家人的分布与客语的分类」、暨南大学出版社《客家方言研究 第二届客家方言研讨会润文集》(p. 47-60)。
- [26] 罗肇锦 1998 「客话特点的认定与客族迁徙」、暨南大学出版社《客家方言研究 第二届客家方言研讨会论文集》(p. 25-46)。
- [27] 罗美珍·邓小华 1995 《客家方言》、福建教育出版社。
- [28] 罗香林 1933 《客家研究导论》、(上海文艺出版社 1992 年影印本)。
- [29] 田惠刚 1993 「汉语方言区划分概説」、《学会界》第 3 期 (p. 90-96)。
- [30] 游汝杰 2004 《汉语方言学教程》、上海教育出版社。
- [31] 袁家骅等 2001 《汉语方言概要 (第二版)》、语文出版社。
- [32] 張德鑫 1992 「从“雅言”到“华语”」、《汉语学习》第 5 期 (p. 33-38)。